

前田家の宝物 尊経閣文庫

この展示室では、前田家が江戸時代（1603–1867）に収集した古典籍、古文書、武具、絵画などの宝物を保管する「尊経閣文庫（そんけいかくぶんこ）」の所蔵品を展示している。前田家伝来の鎧兜、陣羽織、加賀象嵌の燈、茶道具、山水画、書道、時には百工比照（工芸技法を示す見本のコレクション）まで、月替わりで展示している。

国宝 22 点、重要文化財 77 点という、一族のコレクションとしては驚異的な数を誇る。そのほとんどが古文書（古典籍）で、東京の施設に保管されているが、石川県立美術館では、収蔵品のうち約 400 点の美術工芸品の収蔵・展示が認められている。

江戸時代に入ると、前田家は国内有数の豪家のひとつとなり、加賀藩の年収は幕府に次ぐものだった。前田家の財力は、芸術の振興に多大な投資を行い、多くの優れた作品を収集することを可能にした。加賀藩 3 代藩主・前田利常（1594-1658）と、その孫で 5 代藩主・前田綱紀（1643-1724）が収集したものが、尊経閣文庫のコレクションの大部分を占めている。

歴史上、前田家のコレクションの一部は、江戸（現在の東京）の藩邸に保管されていた。江戸時代、藩主の屋敷は本所と江戸の二カ所にあった。幕府の「参勤交代（さんきんこうたい）」の政策により、藩主は毎年、この 2 つの屋敷を交互に行き来しなければならなかった。

藩主の妻や主な相続人は江戸に常駐することが義務づけられていたため、前田家の江戸屋敷には遺品が保管されていた。そのため、1867 年の幕府崩壊の際には、コレクションの一部は東京にあった。残りの金沢藩邸にあった宝物は、明治時代（1868–1912）に東京に永住することになり、東京に移された。

1926 年、前田家 16 代当主の前田利為（1885-1942）が東京に財団法人前田育徳会を設立し、コレクションの整理・保存をした。

東京の保管庫には、事前に許可を得た研究者のみが入ることができる。そのため、日本有数の武家の誇りである名品を一般に公開するのは、前田育徳会展示室だけである。